

大学生の進路選択・決定に向けての職業興味の実態調査研究

——和歌山大学経済学部におけるVPI職業興味検査の実施結果から——

A Study on the Analysis of Investigation of Vocational Interests for University Students

—— Focus on the Case of Students Majoring in Economics at Wakayama University :
by Vocational Preference Inventory (VPI) ——

澤 間 香寿実

Kasumi SAWAMA

(教育学部学生児童教育コース専攻)

本 庄 麻美子

Mamiko HONJO

(和歌山大学経済学部)

佐 藤 史 人

Fumito SATO

(和歌山大学教育学部)

2016年10月4日受理

要約

学生が職業を選択・決定する際には、自身の職業に対する興味を理解しておくことが大切である。本研究では、和歌山大学経済学部学生の職業興味についてVPI職業興味検査の結果をもとに分析した。その結果、一般的な経済学部学生と同じような企画や経営、規則に従った仕事に対する好みや関心が高いことが明らかになった。

はじめに

第2次安倍政権の経済政策としてスタートした「アベノミクス」は、第3次となった現在では成果を一定程度あげており、景気の上向きに伴う求人増は新規学卒者の求人を増やしている。厚生労働省の調査では2016年9月末時点の有効求人倍率は1.38倍で、前年同時期比の0.01ポイント増であり¹⁾、昨年度の好転に加え、更なる求人増となっている。新規学卒者の就職状況によって、キャリア教育への注目や関心が変わり、現在は就職状況が良好であることからキャリア教育の注目度は下がってきている。こうした中で2010年の大学設置基準改正(文部科学省令第3号)以後、大学におけるキャリア教育が義務化され、こうした注目度とは無関係に毎年度その取り組みが実施され、教育実践としての蓄積が重ねられている。

和歌山大学学生を含む大学生の新規学卒者の就職率は、ここ数年良好なので、当時者である大学生の卒業後の進路に対する意識は危機感が失われがちである。在学中の低学年においては、とりわけこれが顕著であり、3、4年生時の本格的な就職活動の前段階として、低学年におけるキャリア教育は重要でありながらも、現在の状況においては、学生自身の自覚的な取り組みは少ない。こうした状況をふまえ、和歌山大学のキャリア教育の前期の取り組みの1つとして、学生の就職に対する意識とりわけ職業興味に関する客観的な調査を試み、その分析に基づいた一貫したキャリア教育へと展開していくことが重要である。

室山は、自己の職業興味について理解した学生はし

ていない学生よりも、情報検索の効率性が高いことを見出している²⁾。古くはスーパー(Super, D. E.)が指摘したように、自己の興味について理解を深めることが成熟した職業決定に必要であり、職業興味は仕事において努力の方向と持続性を決定すると言われ、現在でもこのことは定説となっている³⁾。これらのことから職業興味は、職業選択や職業決定をするときに重要なものといえるだろう。

和歌山大学では、2006年当時の1、2年生を主な対象としVPI職業興味検査を行っている。佐藤、小林⁴⁾は、その結果を用いて和歌山大学学生の職業興味の特徴の一端を明らかにした。本研究では、2015年に和歌山大学経済学部学生(以下単に、「和大経済学生」とする。)を対象に行ったVPI職業興味検査の結果と前研究で使われた2006年に行った同検査の結果とを比較、また性別による差異について検討し、和大経済学生の継続的な特徴を明らかにすることを目的としている。

1. 和歌山大学経済学部の概要

(1) 沿革

和歌山大学経済学部は、1922年に創立された旧制和歌山高等学校商業学校以来の伝統を受け継ぎ、100年近くにわたって社会に多くの優れた人材を送り出してきた⁵⁾。2015年度では、経済学科、ビジネスマネジメント学科、市場環境学科の3学科から構成されており(2016年から再編)、経済学の幅広い領域に触れ、興味ある分野を選択して学べる柔軟なカリキュラムを設けている⁶⁾。また、和大経済学生は、金融・サービス・卸売・

小売・製造などの産業界に毎年多くの人材を輩出している。就職率としては、2015年度は99.0%⁷、2006年度は92.0%⁸という実績があり、当該地域の大学としての役割を果たしている。

(2)経済学部のカリキュラム

2016年度現在の経済学部では、学科とカリキュラムの改編が実施され、2015年以前までの3学科制から経済学科1学科6プログラムとなった。『大学案内2017』⁹によれば、カリキュラムは、教養・基礎科目と専門教育科目から成り立っており、専門教育科目は、「経済学」「経営学」「会計学」「法律学」「情報学」の5つの学問領域で編成されている。

また経済学部では「メンター制」を導入しており、1年生の基礎演習、2年生の発展演習、3年生の専門演習を通じて、複数教員のメンター(助言者)が少人数制で学生一人ひとりの履修を指導することとなっている。学部では、将来の進路を見据えて選んだ各プログラムを通して、必修科目・選択必修科目・選択科目を体系的に履修し、4年生の卒業研究をまとめるサポートをしており、さらに最近の特徴としてアクティブラーニングを導入し、現代社会で求められている「問題解決型の人材」を育成している。

(3)和歌山大学のキャリア教育・キャリア支援

和歌山大学では、学生が希望の進路を実現できるように、「実践的キャリア教育」と「進路選択・就職活動支援」の2本柱で、キャリア支援体制を整えている。

「実践的キャリア教育」は、4年間の大学生活のなかで働くことへの意識と意欲を高め、市民・職業人として社会に参加することができるように、初年度からキャリア教育の実施等をしている。経済学部では、1年次の基礎演習、発展演習や専門演習等で『ロードマップ』を使用し、卒業後の進路を意識し、卒業までにどのように学習していくとよいのかについて考える取り組みを行っている。また、2・3年次の専門教育科目の中では、自分の将来について考える機会を提供し、それをどのように実現していくかを体系立てて考える「キャリア・デザイン」やフィールドワークを通じて思考力テラシー(「PDCAサイクル」という考え方など)を身につける「現代社会実践論」、社会で活躍するOBOGがオムニバス形式で講義を担当する「現代経営実践論」等キャリア教育科目を開講している⁶。

「進路選択・就職活動支援」では、全学部学生を対象にしたキャリア支援として求人情報検索システムによる情報提供、学生ひとりひとりのニーズに合わせた相談等を行っている。主な就職活動イベントには、業界・企業研究、自己分析などの就職ガイダンスが年間を通じて10回、企業80社がブース形式で様々な業界や企業について説明する業界・仕事研究セミナー、企業210社の学内企業説明会等がある¹⁰。

本研究は、上記のような和歌山大学のキャリア教

育・キャリア支援の機能を図る一端としての研究にもなるのではないかと考えている。

2. 和歌山大学経済学部学生の進学意識の調査結果

和歌山大学では、毎年入学してきた学生に対し、新入生アンケート¹¹を実施している。新入生アンケートの項目には、出身地、併願した大学、志望校選びについてなどの設問がある。以下では、「志望大学・学部・学科・過程等を選ぶとき重視したこと」について問1～16まで【大変重視した】【ある程度重視した】【あまり重視しなかった】【全く重視しなかった】の4段階で回答する設問の結果を主に用いて進学動機を分析する。また本研究では、4段階評価を大まかな傾向をつかむために「重視した」と「重視しなかった」の2段階評価に書き替えた。その結果を以下に示す。

- ①学びたいことが学べる
- ②就きたい職業に結びついている
- ③取得できる資格
- ④大学のある場所、通学時間・経路・手段
- ⑤学風・学部の雰囲気
- ⑥国立大学であること
- ⑦大学の設備
- ⑧大学周辺の環境
- ⑨卒業生の進路・就職率
- ⑩学費などの経済的な面
- ⑪受験科目・配点
- ⑫模試などで判定される合格可能性
- ⑬センター試験の自己採点
- ⑭家族や知人の勧め
- ⑮高校や予備校などの先生の勧め
- ⑯学部のアドミッションポリシー

表1 志望大学・学部・学科・過程等を選ぶとき重視したこと

(数値は生徒の割合(%))

問	①	②	③	④	⑤	⑥
重視した	83.1	74.2	43.9	68.1	53.4	94.9
重視しなかった	16.9	25.8	56.1	31.9	46.1	5.1

問	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
重視した	40.6	45.3	72.8	86.9	75.2	60.0
重視しなかった	59.4	54.7	27.2	13.1	24.8	40.0

問	⑬	⑭	⑮	⑯
重視した	75.9	58.4	65.9	38.0
重視しなかった	14.1	41.6	34.2	60.3

上記から「重視した」学生の割合が70%を超える項目には、①②⑥⑨⑩⑪⑬がある。経済学部新入生は、①から経済の学問への意識、②⑨から就職に対する意識が高いことがわかる。また⑥⑩⑪⑬から国公立大学ということ、経済的な面、自身の偏差値といった学問

への興味以外の条件をも重視していることがわかる。

以上のことは、和歌山大学にある経済学部、教育学部、システム工学部、観光学部の4学部全てにおいて似た特徴がでている。つまり和大学生は、国公立大学であるということを重視するが、学部は選ばないということではなく、学びたいことが学べるということをも重視している。よって和歌山大学は、大学入学以前から学問の興味が分化している学生が多いことがわかる。ただし、和歌山大学の経済学部以外の学部における「重視した」の平均は①94.6%、②84.1%であり、ここから和歌山大学内でみると経済学部の「重視した」人の割合は低いことがわかった。

逆に「重視した」学生の割合が、半数の50%を下回る項目、つまり経済学生が大学選びに重視しなかった項目に③⑦⑧⑩がある。経済学生では、②⑨と就職に対する意識が高い学生が多いことに対し、③の資格取得を意識している学生は多くない。和歌山大学経済学部で取得可能な資格としては、卒業と免許状取得のカリキュラムを修了することにより高等学校教諭一種免許状(商業)又、大学での学修を自身で発展させ、個人で試験を受けることにより証券アナリスト、ファイナンシャル・プランナー、不動産鑑定士、税理士、公務会計士、社会保険労務士、司法書士、行政書士がある。この数値結果は、経済学生の就職先の入社時に資格が必須でない企業が多く、大学でも上記の資格を保障していないことが関係していると予想できる。そのため学生自身も資格取得についてあまり重視していないと考えられる。

また同アンケートの入学者の併願した大学・学部等を見ると、近畿圏内の経済学部、経営学部、商学部、法学部が多いことがわかった。上記の学部は、和歌山大学経済学部で学べる学問であるので、学びたいことを決めて、学業以外の面で大学選びをしていることがわかる。

他にも同アンケートの学生の出身地を見ると333人中実家から通える学生が多いと考えられる大阪府出身が120人、和歌山県出身が98人と大阪府と和歌山県を合わせると約65%を占めている。さらに兵庫県、奈良県、京都府、滋賀県、三重県を含む近畿地方出身は、277人であり全体の83%を占めている。これや④の結果にあるように、通学や実家からの距離を意識して和歌山大学経済学部を選ぶ学生が半数はいることが予想できる。

アンケート小括

和歌山大学経済学部新入生アンケートをまとめると次のようになる。経済学生は、経済、経営、商学、法学等の学部への進学を軸としているが、できるだけ自宅に近い大学を選択したいと考えている。その際には、取得できる資格や学部のアドミッションポリシーなどの授業の内容に関わることよりは、就職率の良さ、学

費、自身の学力などに重点を置いて大学選んでいると考えられる。しかし、学びたい学問を重視しているものの、和歌山大学の他学部と比べると、その特徴は突出したものではない。

3. VPI職業興味検査の活用

VPI職業興味検査は、160の具体的な職業に対する興味・関心の有無を回答させることにより、6種の興味領域尺度に対する個人の興味・関心の強さを測定するとともに、あわせて5種の傾向尺度について把握しようとするものである。そして、本検査は、大学生等に対する進路指導や職業ガイダンスに有用な検査として活用されている。本検査は、職業との関わりにおいて自己理解を深め、望ましい職業的探索や職業選択活動を促進するための動機付けや情報を提供することを目的としている¹²。

今次の検査の被験者は、1、2年生対象の経済学部専門科目を履修した学生に限られ、有効回答数は男性85名、女性51名の計136名であった。分析の対象としたのは、検査の結果が得られた6種の興味領域尺度及び5種の傾向尺度のデータである。

分析に当たっては、各尺度の得点を従属変数とし、年度と性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。なお、経済学部には3学科あるが学科を独立変数として分析を行った結果、有意な差が見られなかった。そのため本研究では学科別の比較検討は行わないものとする。

4. 検査の結果

(1) 興味領域尺度の結果

興味領域尺度には、R：現実的職業領域、I：研究的興味領域、A：芸術的興味領域、S：社会的興味領域、E：企業的興味領域、C：慣習的興味領域の6種の尺度がある。各興味領域尺度の内容については、表2に示す。2006年、2015年、『VPI職業興味検査[第3版]の手引き』(以下、単に「手引き」とする。)巻末付録の「各尺度における専攻別男女別平均値と標準偏差」に記載されている「全体」、「人文専攻」、「社会専攻」、「理学専攻」、「工学専攻」、「農学専攻」、「医学専攻」、「家政専攻」、「教育専攻」の中から、被験者全体を表す「全体」及び、上記分類では経済学部は「社会専攻」に分類されることから「社会専攻」の興味領域尺度の平均値と標準偏差を表3に示す。

「全体」と和大経済学生の平均値を比較する。和大経済学生のE、C尺度は、2006年、2015年の男女ともに手引きの「全体」平均を上回っていて、それ以外のR、I、A、S尺度は「全体」平均を下回っている。

また経済学部が含まれる「社会専攻」と和大経済学生の平均値を比較すると、和大経済学生は、R、I、A、S尺度の2006年、2015年の男女とも「社会専攻」

表2 興味領域尺度の種類と内容(VPI職業興味検査 [第3版] の手引きより)

① R 尺度(現実的興味領域) : 機械や物を対象とする具体的で実際的な仕事や活動に対する好みや関心を示す尺度。
② I 尺度(研究的興味領域) : 研究や調査などのような研究的、探索的な仕事や活動に対する好みや関心を示す尺度。
③ A 尺度(芸術的興味領域) : 音楽、美術、文学など芸術的領域での仕事や活動に対する好みや関心を示す尺度。
④ S 尺度(社会的興味領域) : 人に接したり、奉仕したりする仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度。
⑤ E 尺度(企業の興味領域) : 企画や組織運営、経営などのような仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す尺度。
⑥ C 尺度(慣習的興味領域) : 定まった方式や規則に従って行動するような仕事や活動に対する好みや関心を示す尺度。

表3 興味領域尺度における平均値と標準偏差

	2006年			2015年			全体			社会専攻		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
R	2.49(2.76)	1.03(1.32)	2.15(2.57)	2.14(2.44)	1.63(2.47)	1.95(2.45)	3.48(3.34)	2.28(2.78)	2.84(3.11)	2.83(3.01)	2.09(2.57)	2.53(2.86)
I	2.88(3.24)	2.03(2.58)	2.69(3.10)	3.08(3.38)	2.00(2.23)	2.68(3.04)	3.96(3.79)	3.81(3.74)	3.88(3.76)	3.65(3.68)	3.84(3.63)	3.72(3.66)
A	2.95(3.62)	3.13(2.83)	2.99(3.44)	3.04(3.33)	2.75(3.53)	2.93(3.39)	3.91(3.92)	4.42(4.23)	4.18(4.10)	4.18(4.10)	4.62(4.18)	4.35(4.13)
S	3.05(2.83)	2.37(2.06)	2.89(2.68)	2.74(2.61)	3.53(3.06)	3.04(2.80)	3.23(3.15)	4.52(3.56)	3.92(3.43)	3.52(3.22)	4.86(3.61)	4.07(3.45)
E	4.15(3.51)	4.00(3.16)	4.12(3.42)	4.27(3.17)	4.20(3.46)	4.24(3.27)	4.07(3.45)	3.85(3.20)	3.95(3.32)	4.67(3.51)	4.02(3.19)	4.41(3.40)
C	4.00(3.06)	5.03(3.93)	4.24(3.29)	3.59(2.57)	5.35(3.65)	4.25(3.13)	2.83(2.81)	3.61(3.22)	3.25(3.06)	3.31(3.08)	3.93(3.35)	3.56(3.20)

の平均を下回っている。E尺度においては、2015年女性のみ「社会専攻」女性の平均を上回っている。またC尺度においては、2006年、2015年の男女ともに「社会専攻」の平均を上回っている。

(2) 傾向尺度の結果

傾向尺度には、Co：自己統制傾向、Mf：男性－女性傾向、St：地位志向傾向、Inf：稀有反応傾向、Ac：黙従反応傾向の5種の尺度がある。各傾向尺度の内容については、表4に示す。興味領域尺度と同様に2006年、2015年、「全体」、「社会専攻」の傾向尺度の平均値と標準偏差を表5に示す。

「全体」と和大大学生生の平均値を比較する。和大大学生生は、Co、Inf尺度の2006年、2015年の男女、St尺度の2006年、2015年の女性、Mf尺度の2015年の男女

において平均を上回っている。それ以外のAc尺度の2006年、2015年の男女、St尺度の2006年、2015年の男性、Mf尺度の2006年の男女においては、「全体」を下回っていた。

また「社会専攻」と和大大学生生の平均値を比較すると、和大大学生生は、Co尺度の2006年、2015年男女、Mf尺度の2015年の男女、St尺度の2015年男性、Inf尺度の2006年、2015年の男女は、「社会専攻」を上回っている。それ以外のMf尺度の2006年男女、St尺度の2006年男女、2015年女性、Ac尺度の2006年、2015年の男女においては、「社会専攻」を下回っている。

(3) 各興味領域尺度の分析結果

以下では、2006年度と2015年度の2つの検査について、興味領域尺度の統計学的な有意差を検証した。そ

表4 傾向尺度の種類と内容(VPI職業興味検査 [第3版] の手引きより)

① Co尺度(自己統制傾向) : 自己の衝動的行動や考えをどの程度統制しているのかを示す尺度。
② Mf尺度(男性－女性傾向) : 男女を問わず、一般に男性が好む職業にどの程度強い関心を持っているのかを示す尺度。
③ St尺度(地位志向傾向) : 社会的威信や名声、地位や権力などに対して、どの程度強い関心を持っているのかを示す尺度。
④ Inf尺度(稀有反応傾向) : 職業に対する見方がどの程度常識にとらわれず、ユニークであるかを示す尺度。
⑤ Ac尺度(黙従反応傾向) : どのくらい多くの職業を好んだかを示す尺度。

表5 傾向尺度における平均値と標準偏差

	2006年			2015年			全体			社会専攻		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
Co	9.47(3.86)	12.10(2.20)	10.08(3.71)	10.47(3.63)	12.12(2.20)	11.09(3.26)	8.40(4.26)	9.53(4.21)	9.01(4.27)	8.62(4.19)	9.72(3.97)	9.06(4.13)
Mf	6.29(2.49)	4.03(2.40)	5.77(2.64)	7.12(2.11)	5.02(1.56)	6.36(2.18)	6.62(2.68)	4.28(2.35)	5.37(2.77)	6.45(2.52)	4.45(2.36)	5.65(2.64)
St	7.02(2.83)	5.20(2.27)	6.60(2.81)	7.72(2.71)	6.43(2.15)	7.24(2.58)	7.76(2.99)	6.98(2.98)	7.29(3.01)	7.66(3.03)	7.75(2.92)	7.70(2.99)
Inf	7.12(3.45)	7.70(3.01)	7.25(3.35)	6.37(3.00)	8.04(2.85)	6.99(3.04)	5.37(3.21)	5.65(3.29)	5.52(3.26)	5.27(3.16)	5.18(3.03)	5.23(3.11)
Ac	8.42(4.50)	9.03(7.07)	8.56(5.18)	8.99(4.62)	10.04(4.25)	9.38(4.50)	9.33(5.43)	10.45(5.43)	9.93(5.46)	9.65(5.38)	10.81(5.05)	10.12(5.28)

の結果、検査実施時期によって統計学的な有意差は認められなかった。

R尺度においては、性別に有意な差がみられ($F(1, 262) = 8.456, p < .01$)、男性の方が女性より有意に得点が高かった。

I尺度においても、性別に有意な差がみられ($F(1, 262) = 5.353, p < .05$)、男性の方が女性より有意に得点が高かった。

A、S、E尺度においては、性別による有意な差はみられなかった。

C尺度においては、性別に有意な差がみられ($F(1, 262) = 11.205, p < .01$)、女性の方が男性より有意に得点が高かった。

以上をまとめると、性別においてR(現実的)、I(研究的)尺度で有意な差が認められ、男性の方が女性より強い好みや関心を持っていることがわかった。またC(慣習的)尺度でも性別による有意な差が認められ、R、I尺度とは逆に、女性の方が男性より強い好みや関心を持っていることが明らかになった。A(芸術的)、S(社会的)、E(企業的)尺度は、検査実施時期及び性別による有意な差は認められなかった。

(4)各傾向尺度の分析結果

以下では、2006年度と2015年度の2つの検査について、傾向尺度の統計学的な有意差を検証した。

Co尺度においては、性別に有意な差がみられ($F(1, 262) = 21.644, p < .01$)、女性の方が男性より有意に得点が高かった。検査実施時期には有意な差はみられなかった。

Mf尺度においては、検査実施時期($F(1, 262) = 9.532, p < .01$)と性別($F(1, 262) = 53.328, p < .01$)ともに有意な差がみられた。検査実施時期では、2015年の方が2006年より有意に得点が高かった。また性別では、男性の方が女性より有意に得点が高かった。

St尺度においては、検査実施時期($F(1, 262) = 7.313, p < .01$)と性別($F(1, 62) = 18.963, p < .01$)ともに有意な差がみられた。検査実施時期では2015年の方が2006年より有意に得点が高かった。性別では、男性の方が女性より有意に得点が高かった。

Inf尺度においては、性別に有意な差がみられ($F(1, 262) = 6.860, p < .01$)、女性の方が男性より有意に得点が高かった。検査実施時期には有意な差はみられなかった。

Ac尺度においては、検査実施時期に有意な差がみられ($F(1, 262) = 4.987, p < .05$)、2015年の方が2006年より有意に得点が高かった。性別には有意な差はみられなかった。

以上をまとめると、Ac(黙従反応)尺度については、検査実施時期にのみ有意な差が認められ、2006年に比べ2015年は傾向が強いことがわかった。またCo(自己統制)、Inf(稀有反応)尺度においては、性別のみ有意な

差が認められ、女性が男性より強い傾向にある。Mf(男性-女性)、St(地位志向)尺度においては、年度・性別いずれもの要因において有意な差が認められ、両尺度ともに2006年に比べ2015年は得点が高く、男性が女性より強い傾向にあることが明らかになった。

5. 検査結果の考察

(1)興味領域尺度

R尺度において本検査結果では、男性が女性より有意に得点が高い結果がでたものの、男女ともに「全体」及び「社会専攻」を下回る得点となっている。経済学部は、R尺度に直接関係のある学問領域ではないことは、結果が「全体」を下回ることと関連があると予想できる。このことに加え、新入生アンケートから明らかになった学問に関する興味の傾向と一致していることがわかる。一方、和歌山大学の就職実績の結果を見ると、製造業界への就職が多く、本検査結果に反している。そこで、2015年度卒業生のうち製造業に就職する28名の入社後の職種のデータを調べた。その結果、事務従事者2名、販売従事者(営業含む)11名、生産工程従事者1名、その他技術者1名、不明12名(入社後に決定する)という内訳であった。このデータから製造業に就職する学生の大半が、産業分類としての製造業に就職しつつも、実際には職種や職種内容としては製造そのものに関わらないことが看取できる。このことは、和大大学生学生のR尺度が「全体」を下回ること、つまり製造業に就職しても実際の仕事としては、R尺度とは関係の薄い仕事に従事している現実と一致していると言える。

I、A尺度においてもR尺度と同様に、男女ともに「全体」及び「社会専攻」より低い得点となっている。この結果は、和大大学生学生の就職実績の結果である金融・サービス・卸売・小売・製造の業界が多く、研究や芸術の業界が少ないことと同一の傾向が見受けられる。

E、C尺度は、経済学部男女ともに「全体」より高い得点結果が出ている。これはR、I、A尺度とは逆に経済学部の講義にある経営学や商業簿記等の学問内容、また新入生アンケートの結果からわかる経済学部で学ぶ学問に入学前から学生の興味が分化していること、就職実績の結果に一致している。

興味領域尺度では、R、I、C尺度の男女において有意な差がみられた。得点の高低は、「全体」と「社会専攻」と同じくR、I尺度では男性の方が女性より得点が高く、C尺度では逆に女性の方が男性より得点が高かった。ここからは、和大大学生は、性別の差で見たとき一般の大学生と同じ特性を持つことがわかった。男女で有意な差がみられたこれらの3つの尺度を実際に就職している人の割合を見ると、R尺度に直接関係のある製造業界に就職する人は、男性14.8%、女性8.6

%であった¹³。またI尺度に関係のある研究者に占める女性の割合を見ると13.6%であった¹⁴。さらにC尺度に関係のある事務従業者の割合を見ると、男性は25.3%であり、女性は32.2%であった¹⁵。以上の数値結果から実際に働いている男女の割合が職業興味と一致していた。

検査実施時期においては、2006年と2015年の9年間で有意な差はなかった。これは、新入生アンケートからわかる和歌山大学経済学部学生の本来的な進学動機の「学びたいことが学べる」、「就きたい職業に結びついている」、「卒業生の進路・就職率」の3つが9年間での変化がなかったことと一致している。

また和歌山大学経済学部学生は、「手引き」の「社会専攻」と似た興味の特徴をもっており、一般の経済学部学生と興味に関して同じような傾向にあることがわかった。しかし得点を比較すると、和歌山大学経済学部学生は「全体」及び「社会専攻」より特にR、I、A、S尺度では好みや関心が低く、C尺度では好みや関心が高いということから、興味の有無がはっきりした学生が多いことが明らかになった。新入生アンケートから推測できた入学時から興味が多岐にわたっているという特徴が得点の高低をはっきりさせたと考えられる。

(2)傾向尺度

Co尺度は、本検査において2006年、2015年ともに「全体」や「社会専攻」の得点を上回っている。この得点が高い和歌山大学経済学部学生は、用心深く慎重に行動する人で、統制を必要とするような仕事や活動への関心が高いといえる。

Mf尺度は、本検査において男性が女性より有意に強い傾向にある結果が出ており、和歌山大学経済学部学生は、伝統的な性別役割に同調し、それを意識した仕事に関心を持つという特徴があると言える。また年度において経済学部学生男女の得点と全体平均を比べると男女ともに得点の低い順に2006年、全体、2015年となった。つまり、2006年から2015年の9年間で男性では、男性的と呼ばれる仕事や活動を好み、伝統的な性別役割に対する同調性がより高い傾向となり、女性では伝統的な性別役割にあまり関心がなく性別役割より、個性の発揮に価値を置く傾向が強くなったということとなる。男女差はあるものの、女性の得点が上がっているということは、女性の積極採用・女性の管理職など働くにあたって男女差が解消してきていることが女性の意識に働き、男性の好む職業にまで関心が広がってきたととらえられる。

Inf尺度は、女性が男性より有意に強い傾向にあるという結果が出ています。この尺度は、得点が高い人は、一般に誰でも好む仕事にあまり関心がないことや対人的仕事や社交的活動をあまり好まない傾向にあり、逆に低いと社会的評価を重視したり、自分の能力やパーソナリティを肯定的に評価したりするという傾向がある。和歌山大学経済学部学生は、女性が男性より有意に得点が高

い結果が出ているものの、「全体」や「社会専攻」より男女ともにこの数値は高いため、経済学部男性が低いのではなく女性がより傾向が強いと言える。和歌山大学経済学部学生は、就職実績の結果から対人的仕事の多い職業に対する意識が高いことが予想される中、対人的仕事や社交的活動をあまり好まない傾向にあるとされるInf尺度が高い結果となった原因は解明できなかった。しかし、学生一人ひとりの就職先での部署等を調査し、あわせて検討することで新たな発見が期待できる。

Ac尺度は、本検査の結果2006年、2015年ともに全体平均より低いものの、2006年から2015年にかけて有意に得点が上がっている。和歌山大学経済学部は、2004年からキャリアデザインオフィス(現・経済学部キャリア支援室)を開設し、学生のキャリア支援を行ってきた。2016年現在では、和歌山大学の全学部でも学生のキャリア支援を行う体制がとられており、就職ガイダンスや業界・仕事研究セミナーを主催している。これらの取り組みにより学生の業界や企業を知る機会を増やしたことは、2006年から2015年の9年間で学生の職業興味が多岐にわたる要因の一つだと考えられる。また本庄、岩田(2014)¹⁶によりキャリアデザインオフィス(現・経済学部キャリア支援室)は、開設から利用者を増やし、2014年時には利用者率約6割となっていること、利用者の進路決定満足度が開設当時から高くなってきたことが明らかになった。これは学生が業界研究をし、多くの職業を知ったうえで職業を決めることができたことが関係していると考えられる。

6. まとめ

以上から結論をまとめると以下のようなになる。

(1)職業に関する興味について

1、2年生を主な対象とした今回のVPI職業興味検査の結果から和歌山大学経済学部学生の職業興味の特徴は、「社会専攻」つまり一般の経済学部の学生と比べると、ほぼ似た傾向にあることが明らかになった。しかし、細かく興味尺度の得点を比べると、和歌山大学経済学部学生は興味の有無がはっきりしており、入学時から学問への興味が多岐にわたっている、つまり経済学の学問に対する興味が高いことが解明できた。「社会専攻」とほぼ同様の傾向を持つ和歌山大学経済学部学生であるが、S尺度については、「社会専攻」に比べ得点が高く、やや異なりこの尺度では傾向が同様とはいえない。S尺度は、人に接したり、奉仕したりする仕事への興味を表すものであるから、通常この尺度の得点が低い場合には、実際の就職先としては販売や各種の対個人サービスの仕事を選択することはあまりない。ところが、和歌山大学経済学部学生はS尺度がやや低いにも拘わらずこれまでの卒業生の就職実績としては、毎年サービス業への就職が多いという結果となっている。これに関わって、和歌山大学経済学部教員に対するヒアリングによれば、和歌山大学経済学部学生は、サ

ービス・販売の仕事よりは、法人営業や経理、商品企画の仕事に興味関心があるとのことであった。このことはS尺度が低いという結果とそれほど矛盾しないものである。学生の職業に関する興味と卒業時の実際の職業選択・決定との間には、直接的な関係や同じ傾向が必ずしもあるとはいえない。

また和大経済学生の職業興味に関しては、2006年と2015年の比較において、統計学的な有意差は認められなかった。この9年間では、リーマンショックによる就職難やキャリア教育の拡大というような変化があったが、和大経済学生の就職数・率や就職先の企業・業種等の実績が継続的に同様の傾向を持つこともあり、学生の職業興味に関しても時期による差異は認められない。和大経済学生は、入学前の意識もアンケートから経済学の専門分野に対する意識が高かった。今回の1、2年生対象の興味検査では、経済学部に関係のあるE、C尺度の得点が高く、それは2006年の検査でも同様であった。このように入学前から大学教育の初期段階である1、2年生までの興味や関心には一貫性が見られる。今回の研究においては、大学教育の専門教育や中後期段階、及びキャリア教育の効果については検討できなかったが、上記の就職実績と照らし合わせてみれば、入学前から卒業進路選択までに一定の傾向が見取れ、2つの調査時期において同様の傾向を示している。アンケート及びVPI職業興味検査と就職実績のデータでは、被験者が異なるため断言はできないが、和大経済学生の職業に関する意識や興味は、入学から卒業まで一貫し、継続・強化され、就職実績に現れていると考えられる。

(2)職業に関する心理傾向について

和大経済学生の心理的傾向としては、Co尺度の結果に表れているように、用心深く慎重に行動する人で、統制を必要とするような仕事や活動への関心が強い特徴がある。このことは、例えば入学時の大学・学部選択や卒業生の就職実績の結果にも共通する特性を持っていると言える。またInf尺度の結果からは、一般的に誰もが好む仕事にはあまり関心が無く、また自分を取り囲む社会の一般的価値観とは異なった価値観を持つ傾向があり、対人的仕事や社会的活動をあまり好まないという特徴が明らかになった。和大経済学生は、堅実・慎重であり、保守的・安定志向などの評価が一般的とされてきているが、このInf尺度の結果とは異なる傾向が読み取れ興味深い。

用心深く慎重であるという傾向を測るCo尺度とユニークな思考を持つという傾向を測るInf尺度の結果からは、やや矛盾する傾向が同時に見取れる。これに関わって和歌山大学経済学部教員に対するヒアリングによれば、和大経済学生は経済学部にも所属している環境、保護者の希望・期待、あるいは和大生全体に見られる保守的・安定志向などの影響から用心深い傾向が

あると同時に、経済とは関係のない医師や教師、心理士といった職に就きたい、チャレンジしたいと考える学生が例年一定程度いるとのことである。こうした異なる、あるいは対立する傾向を内在する学生は、葛藤を抱えることも少なくない。

また経済学部は、教育学部や医学部などのように特定の職業資格・免許の取得と就職先が決まる学部とは異なり、就職先の業界・業種の選択肢が広いことが特徴であるので、本検査でのCo尺度とInf尺度の結果は、和大経済学生の固有の特徴を表している。

おわりに

本研究は主に新入生アンケート、VPI職業興味検査、就職実績の3つのデータ結果から職業興味の考察し、和大経済学生の特徴を明らかにしたが、3、4年生時の学生に関する情報が不足している。今後は、3、4年生時の何らかの意識調査やキャリアセンターに通う学生の様子、履修状況などのデータを調査・分析することで、より明確に和大経済学生の特徴を明らかにする必要があるだろう。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、和歌山大学入試課から貴重な資料の提供を賜った。最後に記して謝辞を表す。

注

- 厚生労働省 一般職業紹介状況
- 室山晴美 「自己の職業興味を理解と進路に対する準備度が職業情報の検索に及ぼす効果」 『進路指導研究』第18巻1号 1997年
- 代表的な物を以下に挙げる。
 - ・神谷孝男 『現代青年の進路選択と進路指導』実務教育出版 1980年
 - ・仙崎武、野々村新、渡辺三枝子 『進路指導論』福村出版 1991年
- 佐藤史人、小林由佳 「和歌山大学生における職業興味の特徴に関する研究」 『和歌山大学教育学部紀要(教育科学)』第59集 2009年
- 『和歌山大学入学者選抜要項』 2017年
- 和歌山大学公式ウェブページ <http://www.wakayama-u.ac.jp/> (最終確認:2016年10月1日)
- 2015年度就職率は以下の計算式で算出する。
就職(内定)率=就職決定者(就職者+自営業)/就職希望者(就職者+自営業+就職活動中)=288/291≒99.0%
- 2006年度就職率は以下の計算式で算出する。
就職(内定)率=就職決定者(就職者+自営業)/就職希望者(就職者+自営業+就職活動中)=277/301≒92.0%
- 『和歌山大学[大学案内2017]』 2017年 p.43,44
- 前掲注 p.81
- 平成27年度和歌山大学経済学部 新入生アンケート(集計表)
- 『VPI職業興味検査[第3版]手引』 日本文化科学社 2002年

- 13 文部科学省 学校基本調査－結果の概要 平成28年度 図
5. 産業別就職者の比率
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/08/04/1375035_3.pdf
(最終確認：2016年10月28日)
- 14 内閣府男女共同参画局 研究職に占める女性の割合の国際
比較
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h17/gaiyou/html/zuhyo/G_08.html
- 15 文部科学省 学校基本調査－結果の概要平成28年度 図
7. 職業別就職者数の比率
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/08/04/1375035_3.pdf
(最終確認：2016年10月28日)
- 16 本庄麻美子、岩田英朗 「和歌山大学経済学部におけるキ
ャリア教育の実践と効果」
『経済理論』382号 2015年